

## 終章 美しさを求めて生きる人生を

### 1 私に何ができるか

生徒一人一人が生き生きと自らを表現する授業は、いろいろな人を変えていく。中学生の授業にはそういう可能性がある。当初、板野中学校において全体学習を公開してきた意味がそこにあると思う。私たちはそんな授業実践での一人一人の発言を大切に、毎年実践記録『峠を越えて』をまとめてきたが、この『峠を越えて』に収められた指導案や授業記録の中には教師自身の精一杯の生きざまがあり、板野中学校の生徒たちの誠実な訴えがまとめられてきた。その巻頭言にも、そのときそのときの校長先生の精一杯の訴えがある。

全国同和教育研究大会が徳島で開かれたときに紹介された『峠を越えて』(1993年度版)の巻頭の言葉に、当時の板野中学校長であった吉野教夫先生は「私に何ができるか」と綴られた。部落問題の解決は私たち一人一人の問題である。部落問題はどこにあるのかというと、それは私たちの家族の中にあり、私たちの身近なところにある。言い換えれば私たちが生活している「今」「ここ」にある。「今」「ここ」にある問題を私たち自身が「今」「ここ」でどのように関わり、どのように差別解消への行動をとっているのか。その具体的な事実を通して、生徒一人一人に訴えていかなければ、差別解消への熱や光は本物にはなっていない。そのことを吉野先生は自らの具体的な事実を通して綴られている。

その意味で、『峠を越えて』にまとめられている授業実践は、まさに「今」「ここ」を洗いながら、人間が人間として解放されていく道筋を明らかにしていこうとした授業実践であると言える。

1993年度の『峠を越えて』の中に、吉成正士先生の指導案とそのときの授業記録が掲載されているが、彼の実践は如実に「今」「ここ」を洗う人権・部落問題学習のあり方を提起している。彼は全体学習がスタートした2年目に板野中学校に赴任し、赴任した翌年、私と同じ学年で共に全体学習に取り組むようになったが、私たちが常に大切にしてきた考え方は、以下のような原則である。

「部落問題は私たちの家族の中の問題である。強烈な部落差別意識を持った人が、私たちの父親であつたり、母親であつたり、私たちの家族の中にいたりする。また、おじさんであつたり、おばさんであつたり、身近な親戚の中に存在したりする。そんな最も身近なところに存在する問題である。その身近なところにある問題をしっかりと解消していくという姿勢もないのに、生徒の前で差別をなくしましょうと訴えても、それは生徒たちに嘘をつき続けることであり、二面性を持って生きることや嘘のつき方を教えることになる。」

私は板野中学校で本気で人権・部落問題に取り組んでいく多くの仲間と出会っているが、吉成先生もそんな仲間の一人である。彼は彼自身が全体学習を実施するときに、人権・部落問題学習の原則を貫くように、その全体学習の指導案の中に、身近に存在する部落差別の現実を綴っている。そして、家族と部落問題について語り合い、彼の母親は彼の頑張りに応えるように、その全体学習を参観されている。

どの学校にも本気の先生はいるが、なかなか自分自身をさらけ出せないのが現実である。それは自分が突き進んだとき、自分の後ろにだれもついてきてくれないという寂しさを知っているからで

ある。でも板野中学校の全体学習は全部のクラスが、全体学習の公開討論に取り組み、その指導案には、教師自身の生きざまを綴るといことが当たり前のことになっており、みんなで本気になって取り組んでいくという「よろこび」を多くの教師が共有していくようになる。

また、私たちは部落解放への営みをより確かなものにし、この全体学習という取り組みが、多くの学校に広がっていくことを願って、常に全体学習は、他校の先生方にも公開してきたが、そんな私たちの思いを象徴する第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業（1991年11月19日）に寄せて綴られたH夫の生活記録を紹介する。

【部落問題学習でつかんだもの、それは3年B組という固い団結の絆だと思う。一人一人の悲しみが怒りとなって語り合い、そして支え合っている。

公開授業が終わったとき、男の先生がぼくのところにきて、「頑張ったなあ」と言ってくれた。ぼくはものすごくうれしかった。発表して本当によかったと思った。この先生だけでなくほとんどの先生たちが、この学習の大切さをわかってくれたと思う。この3年B組で、この3年生で、そしてこの板野中学校で燃やしたこの炎を、多くの先生たちが、また誰かにつないでくれたらと思う。

自分の思いを語っていくことによって、自分という人間が変わったと思う。2年生に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。

そして、朝がさわやかに感じられ、人の優しさというものが見えてきたと思う。今日帰るときコスモスの花が、太陽に照らされていた。まるでぼくに勇気をくれているような気がした。

過去を背負うのではなく未来に希望を持ちながら、頑張っていきたいと思う。これからも悲しさではなくうれしさで、そして嘆くよりも怒る気持ちで、これからも峠を越えていきたいと思う。支え支えられてこれからも、自分というものを見つめて頑張っていこうと思う。

今日帰るとき、女の先生から声をかけられた。「授業、感動しました」と言ってくれた。ぼくは「学校に帰ってからも同和教育頑張ってください」と言った。後でもっといろいろな話をしたらよかったと思った。でも多くの人の心が動いてくれたことがうれしい。こう言ってくれる人たちは学校に帰っても頑張ってくれると思う。ぼくも人任せにならないように頑張っていくつもりです。

果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたつぷり浴び、空気を思いきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても、弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。】

## 2 生命を輝かせていく営み

中学校3年の社会科公民的分野の一番最初の学習において「家族のあり方」をテーマに、家族に対する様々な思いや願いを生徒一人一人が、主体的に語り合う授業を実施している。それは、生徒一人一人が誠実に家族の存在をみつめ、自己の生き方を内省し、家族に寄せる願いや思いを語り合っていく授業である。

この授業実践の中で、1年生から担任してきたA君が、家族について様々な意見を出してくる級友に、その心の底にある家族への思いを語っていった発言は、級友の心を大きく揺さぶり、彼の人生観を大きく変えていくようになる。それは、A君の幼くして父親を亡くした悲しみと、その背後

にあった部落差別への怒りであった。私はその発言に対し、当時、高校3年であり、中学3年の時担任した彼の兄との思い出を返した。それは次のような語りである。

「A君のお兄さんが中学3年だった3年前、私はA君のお兄さんと、狭山差別事件と言われている部落出身ということで誘拐殺人犯にでっち上げられた石川一雄さんの裁判のやり直しを訴える集会に参加したことがあったんです。その集会で語られた石川一雄さんに対する部落差別と、自分の父親の生命を奪った部落差別とが重なり、彼の生き方は大きく揺さぶられていきました。

その帰り、徳島大学の近くの信号で車を止めた時、私の横に座っていた彼が、突然『先生、あの信号の向こう側にあるガソリンスタンドの隣に食堂があるんよ。あの食堂にワイの父ちゃんが、ワイを連れていってくれたことがあったんよ。あの食堂ごっついうまいんよ。ワイの父ちゃんめちやくちや優しかったんよ』と話しかけてきたんです。

私はそのとき、それまで口数の大変少なかった彼が、語ったその言葉で胸がいっぱいになりました。今もその場面とその言葉が、私の心に生きています。その言葉から、彼自身のお父さんの思いを精一杯担ぎ、部落問題を直視する生き方がスタートしたと思います。

部落差別を始めとする様々な差別をなくしていくという営みは、人間性を取り戻していく闘いなんだと、私はA君のお兄さんのそれ以後の頑張りから実感しています。」

この私の語りを身体全体で受けとめているA君の姿が、私には輝いて見えた。その翌朝、A君は登校と同時に、その授業についてのレポートを「先生、これを読んでください！」という表情で、私に直接持ってきた。そのレポートを読んだ時の震えるような怒りと感動は、今も鮮やかによみがえってくる。そのレポートは、次のようなものである。

【みんなの「父親がうっとうしい」という言葉を聞くと、とても腹が立ってくるけど、なぜか羨ましくもなる。それは父親がうっとうしいのは父親が活着ている証拠だからだ。

僕の父さんは生きてはいない。酒がもとで、アルコールがもとで死んだ。僕が小学校一年の入学式の日死んだ。そのとき僕はなぜか泣かなかった、いや泣けなかつた。涙が出なかつた。まだ小学生になったばかり、入学式の日のことだから、父さんが死んでしまったという意味を理解してなかつたと思う。

けれど父さんのことを書いたり、話をしたりしていると涙が出てくる。今日の公民の時間「父親がおらん」という話をして、先生が僕の兄さんの話をしてくれた時、僕は必死に涙をこらえていた。

僕たち兄弟の部落差別に対する思いは、部落差別が憎くてしかたがないという気持ちだ。なぜなら、父さんが死んだ、もう一つの理由に部落差別があるからだ。父さんは仕事先で、部落のことについて差別的なことを言われて悔しい思いをした。とても静かで、優しくとてもよい父さんだったが、部落差別を受ける中で、酒を飲むようになり、その酒で生命を縮めていった。

その優しくなつた父さんが死んだと聞いて、なぜかとても複雑だつた。小学校1年の時で、他のことはそんなに覚えていない。でも、父さんが亡くなつた時、とても悲しかったことははっきりと覚えている。兄弟3人の中で一番僕が父さんへの思い出が少ない。僕はとてもこの悲しみから一生逃れることはできないと思うし、誇りにもできないけど、父さんのことを心に刻んで一生忘れることのないように生きていきたい。

僕には父さんがいないけど、その分母さんがいる。2人の兄さんがいる。その母さんと兄さんが、父さんの代わりをしてくれている。とても感謝したい。けれど父さんがいないのは、とても悲しいことには違いない。父さんが死んで一番悲しいのは、ばあちゃんでもなく、じいちゃんでもなく、二人の兄さんでもなく、僕でもない。父さんが亡くなって一番悲しいのは母さんだと思う。

そう思うのは、父さんの葬式の時、母さんが父さんの<sup>ひつぎ</sup>柩にしがみついて泣いて離れなかったからだ。それだけ母さんは悲しかったのだと思う。

母さんの悲しみと父さんの無念を、何とか次の人、次の人へとつないでいって部落差別をなくしていきたいと僕は思っている。だから僕は学習会に一番多く出席している。その勢いで高校へ進学し、高校進学後も真友会（高校生友の会）にも参加して、部落解放の道を歩いていきたい。そして、僕は、一日も早く部落差別がなくなることを信じて行動していきたい。】

このレポートは、それ以後のA君自身の生き方そのものを大きく変えていき、A君にとっても、A君の家族にとっても、A君を取り巻く一人一人の生徒にとっても大きな意味を持つことになる。

様々な不安定な状況で揺れている生徒がいる。しかし、そこに本気で生き方を語り合う授業実践が成立したとき、生徒一人一人はその語り合いから、自分をみつめ、その生き方を力強く変容させていく。人権・部落問題を学ぶ営みは、まさしくその生命を守り、生命を輝かせていく営みである。

### 3 熱と光をもとめて

同和教育の「よろこび」、それはまさしく人と出会い、人とつながる「よろこび」である。私はこれまでの道徳学習や人権・部落問題学習の実践の中で様々な仲間との出会いがあった。その中には部落差別の現実に直面し、その中で揺れながらもひたむきに頑張っている仲間との出会いも数多くある。2000年6月に出会った福岡県の岡島嘉代先生との出会いも、私を励まし続けてくれる。

彼女は、私が文部省（現・文部科学省）の道徳資料として作成した『峠』の授業に取り組んでおり、資料を通して早い時期に出会っているが直接出会ったのは、2000年6月の先生の勤務する学校での職員研修であった。そのとき、校区の同和地区をフィールドワークさせていただいたが、そのことに重要な意味があることを自覚するのはその半年後であった。

当時彼女はその地区出身の青年と交際をしており、その夏には2人で四国を訪ねるようになる。そして、2000年12月25日、結婚式を挙げるのであるが、それはまさに結婚差別という峠を越える営みであった。それは結婚式の招待状に添えられた手紙に切々と綴られていた。

【突然のお便りにびっくりされたことと思います。先生には、どうしてもお伝えしたく、また、お渡ししたくてペンをとらせてもらいました。

以前より、先生にお話を聞いていただきました彼と、来月25日結婚することになりました。今、こうして穏やかにお伝えできるようになりました「よろこび」を改めて実感しております。これも先生の力強い心の支えを頂いたからだと思っております。

不思議なもので、人生にはたくさんの出会いがあると思いますが、先生との出会いは何か人生の深い巡り合わせのようであり、先生のお書きになられた『峠』という資料に出会い、これだと強く

心に実感したあの時から、数年後に本当に先生と出会うことができ、しかもいっしょに彼が住んでいる地区を案内させて頂き、いっしょに歩かせて頂いたこと、なんだかずっと前から、この出会いが繋がっていたかのごとく、今、振り返ると不思議なくらい先生との出会いは、私にとって大きな大きなものでした。

そして今も、あの『峠』の作品に出会っていなかったら、私は家族との苦しい時間を乗り越えることが出来なかったかもしれないと思います。いつも苦しい時、きつい時、あの作品の中に出てくる家族を思い出し、いっしょに語ることができました。

苦しい夏も、一度四国に彼と訪れ、そこで見た四国の海、地平線に未来を確認しました。そんな時、先生にお電話させて頂き、本当に暖かい激励を頂きました。目を熱くしました。どんなにかうれしく、どんなにか大きな勇気を頂いたことか。本当に本当にありがとうございました。

今、父とも結婚式の話ができるようになりました。そんな父に私は感謝しています。これから乗り越えなければならない峠も、きっと父と母と姉と、そして彼と彼の両親とで乗り越えて行けそうです。なんととっても私たちを支えてくださる多くの多くの人々の愛に包まれていると感じます。

人が人と出会って、つながっていく。支え支えられ、よろこびも悲しみも分かち合える。素敵だなんて思います。そして、今、その多くの人々の支えの中で生かしてもらっている私たちです。】

文部省の道徳教育読み物資料として作成した『峠』を大切に実践し、それを生きる支えとしてくれる仲間が存在、私はそんな仲間の一人一人に生かされている。

まだまだ厳しい部落差別の現実はある。しかし、その峠を乗り越えていく姿は、人間としての輝きを放っている。人間として生きることの意味をしっかりとつかんでいく人生を一人一人の生徒が、しっかりと担いでいく教育実践を積み上げていきたい。

それはまさに「美しさを求めて生きる人生」を創造していく営みである。最後に生命の輝きを放って結婚した2人からいただいた結婚式の招待状を紹介させていただき、本冊子のまとめにしたい。

【 暖かい日差しの中、偶然出会った二人。

そこには不思議な風がそよいでいた。

ゆるやかに流れる大河のように、ゆっくりとそして確実に  
大海原に注いでいく。

今、ようやく支流に辿り着いたにすぎないけど

必ずや幾多の支流と合わさり、一本の大河となって流れていくことを信じている。

そのすすむべき道、たとえ険しくとも、何事にも同ぜず屈せず、歩んでいきたい。

そよ風のようにやわらかい風に包み、包まれて。

辿り着く大海原の水平線に 光 おだやかにふりそそぐ。

熱と光 もとめて

ふたり 歩いていきます。 】